

大伴小だより



富田林市立大伴小学校 令和3年5月28日（金）6月号

「生きるっちゃうのは、ホンマにしんどくて…おもろいなあ！」校長 堤 周作

5月12日の放送集会で次の話をしました。（以下要約、大人向けに文言を編集）

昨日、11日は大伴小学校の創立記念日(今年度より授業日)でした。今の河南町の大ヶ塚小学校(今は存在しない)から分離してできたのが本校です。誕生は1905年(明治38年)だから、昨日で116歳になり、今日から117年目に入りました。

1905年は、1年半続いた日露戦争が終結した年になります。小さな日本が、大きなロシアと戦って勝ったのですが、ロシア人で亡くなられた人は約4万人で、日本人で亡くなられた人が約12万人。今の富田林市の人口約11万人全員が亡くなってしまったほどの戦争で、日本は勝ったというものの、かなり被害が大きかった戦争でした。そんな時代に、木造の校舎ができて始まったのが本校で、改めて長い歴史を感じます。そして、今の児童の子どもや孫にも続いていかなければなりません。

ところで今、わが国ではコロナ感染予防のワクチンを打ち始めています。4月から、一番コロナと戦っている医療従事者の皆さんが打ち始め、5月から高齢者の方も打ち始めています。先日、富田林市から、市民の皆さんを明るく元気づけるため、接種会場に貼るメッセージ作成の依頼がありました。

そこで、今の4年生が3月に6年生のお別れ集会のために作成してくれた、気球の飾りを再利用して、56年生の代表委員にメッセージを考えてはりました。

また今年、本校が市社会福祉協議会の事業に選ばれて、たくさんのお花と土などをかう予定です。園芸栽培委員にその花々をメッセージ付きのプランターに植えてもらい、校区の高齢者施設や、障がいのある方々の作業所、かがりの郷などの福祉施設等に、初夏と秋の2回、寄贈しようと計画しています。

お年寄りや障がいのある方々は、今コロナに感染したら命の危険があり、外に出歩くことがなかなかできません。そんな皆さんに、普段元気なみんなからのメッセージは勇気づけられることだと思えます。

116年の長い歴史がある大伴小学校、今を生きる一人ひとりのみんなが、優しく頑張っていて、輝いて、昔の大伴小の人たちや、未来の大伴小の子どもたちに、今の大伴小の子どもたちや先生たちは「頑張っているで、みんな温かいで」と、胸を張れる、素敵な学校にしていきたいと思います！

これから接種会場に行かれる方は、是非ご覧ください(NHK、朝日新聞等で紹介されました)。



ところで、大伴小校区(現東板持町)出身の浪花千栄子さんがモデル(脚色あり)のNHK朝の連続ドラマの「おちょやん」が14日に最終回を迎えました。これまで学校だよりで何度も触れたのは、私たちの身近で生まれ育った方という親しみと、生きることはしんどいし誰にでも思いがけない試練が降りかかることがある中、全ての人の人生を肯定する優しさに溢れており、とても共感できたからです。

描かれていたのは、「過酷すぎる人生、苦しい人生の中でいかに皆から愛される存在になったのか」「完璧な人間などないこと。どうしようもなかったり間違ったりする。その時にいかにやり直すか、救せるか」「血縁によって構成される「家庭」との縁が薄い中、懸命に生き、人は血縁とは関係なく家庭がつくれるし幸せになれる」「酷い仕打ちを受けた肉親とどう向き合うのか」「互いの孤独が強いエネルギーとなり、添ったはずの関係が壊れた時にどう生きるのか」「人を救す、救さないことは自分の中でどんな感情を生むのか」「逃げつない苦難と孤独にさいなまれた人々がどう救われていくか」などです。ドラマにありがちな単純なサクセスストーリーではなく、観た人それぞれが違う場所にフォーカスをあてて視聴できた、私たちの心を映す水面のようなドラマでした。

本校においても、児童自身や保護者さん、家族の方からたくさんの相談が寄せられます。私自身が直接お聞きすることはまれですが、担任等を通じて聞いた困り事や悩み事に対して、関係教職員で協議し可能な限りの支援を行う場合や、それとなく見守る場合などがあります。そんな困難に対してご家族と一緒に悩みながら一歩ずつ歩んでいくと、時間がかかっても光明が必ず見えてきます。様々な状況を抱え、懸命に生活している子どもたちが愛おしく思えます。

最終回、千代が再び舞台に立った渾身と演技と、強さと柔らかさを併せ持つ大阪弁の迫真のセリフが心を打ち、いつまでも余韻が残りました。そのセリフが、冒頭の言葉です。(裏面へ)

「もしあのまま～～だったら、どないな人生あったんやろか」「そないなこと、考えてもしやあないがな」「そうですね。今ある人生、それがすべてですな」…「生きるっちゃうのは、ホンマにしんどくて…おもろいなあ！」【参考・一部引用】朝日新聞 5/13 夕刊:「おちょやん脚本家・八津弘幸さんに聞く」